

文化の工房

花崎 晶



バンガールダンスシアター・アポリジニー・アイランダ
ーオーストラリア九名：「ノーモアブーメラン」ほか

八月六日 札幌芸術の森

七月九日 先住民会議／二風谷広場

ベターブコス八名（フィリピン教育演劇協会・民衆芸術
と文化の為の全国ネットワーク）：「キャブテンポボン」

八月 九日 東京AWSL集会・うた

十二月 東京「ルックアジアウィークエンド」

十五日 名古屋

十八日 大阪

二十二日 水俣

二十五日 福岡「アジアンフェスティバル」

カラワン八名タイ：「メイドインジャパン」

八月十二日 東京「ルックアジアウィークエンド」

十七日 東京

十八日 宮崎・綾町

二十一日 水俣

二十四日 大分・大山町

二十六・二十七日 福岡「アジアンフェスティバル」

二十八日 中間

チャンバワンバ八名（疲れを知らないパンフレット書き）

イギリス：「スラグ・エイド」「ニカラグア」ほか

八月十三日 東京「ルックアジアウィークエンド」

十五日 東京女性フォーラム集会

まず、トータルな意味において「民衆の表現をさぐりだそう、創ろう」というこのセクシオンをつくり、文化にもオルタナティブなあり方を問う、としたことは意識的画期的な試みだったとおもう。『売れ』さえすれば何でも溢れかえっているが、「一緒にうたう歌もなくなくなつてしまった」といわれる日本のなかで、文化運動が問われ、もとめられているのは確かだ。

しかし実際、PP21をよりひろいバブリシティとメツセージ性をもつたものにしたという願いから生まれた海外グループの「公演をする」ということと、自分たち自身の表現を地域のなかに「そだてる、ほりおこす」ということ、そして会議や集会のスタイル自体もかえていくという構想には、欲張つたゆえの消化不良をおこした感がある。エネルギーも時間もじつくりとかけなくてはならないことだろう。

会議と別のプログラムとして運営したことも結果的には、文化の工房が独立しきれず、東京のコーディネイト事務局と重なつてしまったことで、実務上もかなりの無理がかかった。財政は、助成金（日本アセアン学術交流基金）と後援（航空会社等）によって渡航と制作に関する費用の半ばをまかない、その他の共通費用すべては主催地域の分担とした。会議プログラムと同時に抱えていた地域は、各公演・ワークショップも基本的に独立採算だったので負担が重かつたと思う。

今回は、昨年に続いて演劇ワークショップと、四つの文化グループを招いたそれぞれの公演キャラバンをおこなった。周到な用意ができなかったのは惜しかったが、どれも予想をはるかにこえた素晴らしいグループで、貴重な機会が得られたことは非常にうれしかった。

演劇ワークショップ方法としての可能性

今年五月三〇日から七月二日まで札幌、清水（静岡県）、三多摩（東京）、大阪、神奈川の五ヶ所で、日本の黒色テント、タイのマヤ、インドのCCA、フィリピンのベタという演劇グループからひとりずつ四人のファシリテーター（進行役）でおこなった。夏の会議・公演と時期的に迫つており、昨年のような全国合同の発表はできなかつたが、地域ではできるだけ参加者外への発表と交流の場をもつようにした。

エクスポージャー（現場での取材）をし、地域の問題をアジアからのファシリテーターとともに再発見し、そのなかから共有できる主張をもつたひとつの芝居を創りだしていく一連の過程は、やってみなければ味わえない共同作業を体験する。たとえば三多摩では、天皇献上米を出した農家を取材し劇にした。七万粒と定められた献上米は非常な管理の下でつくられ、その一切の負担をした農家には恩賜タバコや菓子のみがおくられる…。

思わぬ発見や自分たちなりの調査や地域の歴史、文化

のほりおこしができ、方法としては様々な活用の可能性をもっている。

清水のグループは、続けていきたいと独自に活動を始め、昨年行なった山梨では、地域でフアシリテーターができ、地元を増えているアジアからの出稼ぎ労働者の調査などとむすびつけたいというアイデアもあがっているという。身近な問題から共同の表現を通じてアクティブな、継続的なグループづくりが期待できる。

先回到ひきつづき多大な貢献をしたのは劇団黒テントだった。自らが表現を追求しつつ、なおフアシリテーターの養成も含めた息の長い活動をおこなう主体が、やはり必要だ。PP21をとおしてできた関係やこの方法をどう生かして民衆の力にしていくかが課題といえるだろう。

文化キャラバン

どのグループも内容・技術ともに充実し、アレゴリーを生かしてそれぞれ状況や表現、あるいは伝統的な民衆の息吹をつたえたものであった。

新しい出会いだったアポリジニーのバンガールダンスシアターは、北海道実行委の熱意と非核独立太平洋運動のロベティ・セントウリさんなどの協力により実現を果たした。先住民会議ではオーブニングから二風谷の野外公演まで参加し、人々をまきこんでともに踊り、歌い、表現そのものが民族の存在を主張したものだ。演目

には伝統をうばわれたアポリジニーの苦悩を表現するもの、モダンダンスを取り入れたもの、コミュニティから取材した楽園の踊りなどがあつた。

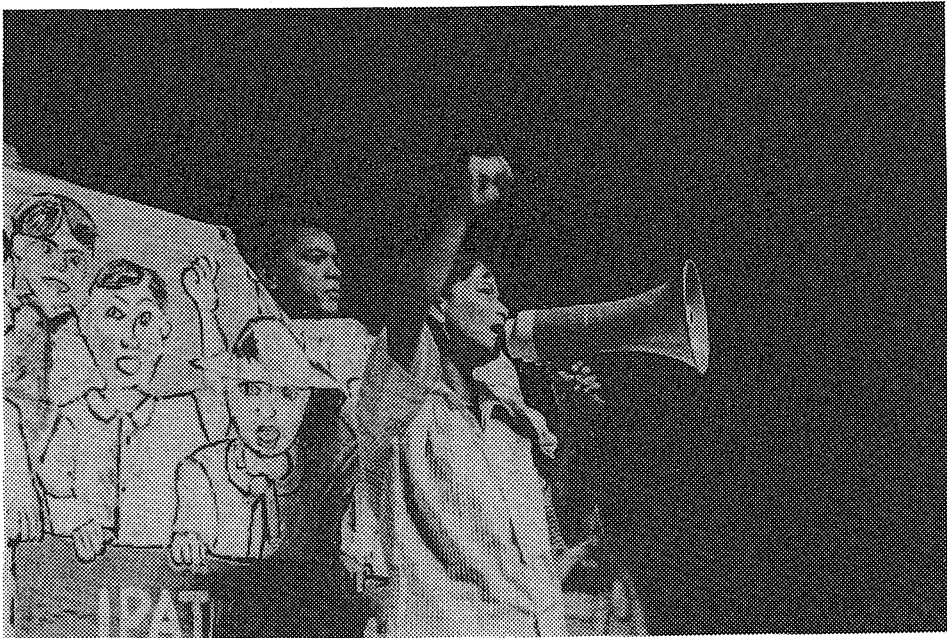
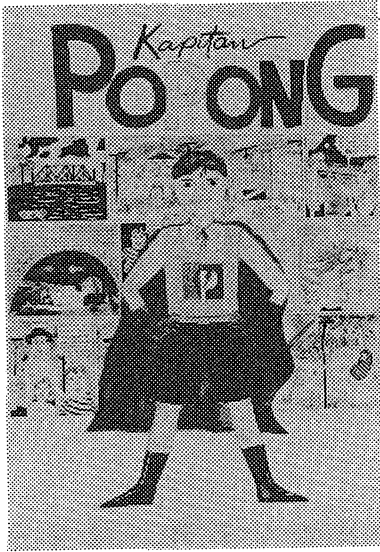
イギリスからやってきたチャンバワンバも初公演で、東京の自主制作でロックをやる若いバンドによって紹介・主催された。バンクロックを単なるフアッションではなく、世界的な視野と批判精神で詩うものとしており、聞き手は少なかつたがとても新鮮な感銘をあたえた。この公演は赤字をかかえたが、主催グループはビデオとテープを売り出すとのこと。ご協力を請いたい。

ベターブスは、フィリピンの貧農の子どもポボンの目をおして描かれたユーモアたっぷりの鋭い風刺劇を一八才から三一才という若手八人で演じ、カラワンはバンド最後のフルメンバイ演奏で、水俣、福岡の野外をおおいに盛り上げ、また九州の農村もめぐった。いずれも竹や木製の民族楽器をとりいれた独特の演奏が際立った。文化グループの多くは他の海外参加者との交流が少なく、議場に参加していくようにもできなかったのは、企画上の反省点であり、今後に生かしたい。

集団で、しかも楽器や装置を運びこんでの巡演には、多くの方が舞台裏で、会場外で走りまわった。アジアのグッズを売ったり旗や料理づくりで参加した方もいる。この場をかりて、ひとまずおつかれさまと感謝をのべたい。

グループとパフォーマンスの紹介は東京公演「ルック
アジアウィークエンド」のパンフレットに掲載しており、
収録したビデオも今後編集する予定。ベターブコスのシ
ナリオは大阪公演を主催したフィリピンと日本を考える
会に翻訳がある。

文化グループだけでなく集まってきた海外参加者の表
現が、それぞれ豊かでのびやかだったことには感激し、
刺激された。演説のなかですばらしい歌や詩をかたる者
や民族のしかたでの祈りを議場にひき出し、ともに祈る
ことをうながしてくれた者もいた。芝居やコンサートに
も反応がよかった。はるばる運んできた楽器を手に、歌
ったり、踊ったりが、話し合うなかで自然に、あちらこ
ちらでつづいていた。越境した文化の工房は、そうした
場でふいにあらわれていたように思える。



大阪にやってきました。ペタ

小森 恵

P P 21の賛同団体になったものの具体的な関わりをみつけれないでいた矢先、ペタの公演の誘いがまいこんできて思わずとびついたのがこの始まりでした。資金なしアイデアなしの私たちは、ただただペタの演劇を大阪で観たい、観てほしいという願望だけに支えられてスタートしました。どんな作品なのかも気にせずやるしかないと決めて、それから公演までの具体的な作業や活動をインプットしていきました。今思えば、すごい思いきりです。

宣伝や準備のために、ペタからエリアさんに来てもらい交流会やミニ・ワークショップをあちこちでもち、P P 21の演劇ワークショップを三日間十五人で合宿して開き、フィリピン映画のビデオ上映会を行ない、切符の売れゆきに肝を冷やし、お盆とお正月が何年分もいっぺんにやってきたようでした。

オルタナティブの言葉すらつかみきれない中、今までの経験と少しばかりの冒険だけを頼りに進めてきました。その過程で新しいもの異なるものとの出会いがあり

戸惑いがありました。例えば、ペタからちつとも台本が届かない、よく聞けば台本の叩き台はあるけれど稽古の度に変わっていく、それも後一カ月の段階で。宣伝にでかけて「どんな筋なのですか？」と聞かれても骨子しか説明できないし作品のみせどころも言えず、ペタってこんな素晴らしい演劇集団なんですよと、そこばかり強調したことも度々。日本の慣習、それも商業ベースならばなおのこと、このような準備で公演に人々の目を惹きつけるのはかなり至難の業かもしれません。でも私たちは、少しばかり我慢をしながら、フィリピンの中でペタとブコスが準備を進めている構図に思いを馳せ、新しい発見をじっくりと味わい、異なるものとの接点を見つけようとしてきました。オルタナティブとは程遠いですが、当たり前とやりすごしてきたことを見直す姿勢を少しばかり学んだような気がします。

公演は予期せぬ程に盛況でした。八〇〇の席がほぼ埋まり会場は来て下さった方々の笑いと熱気で包まれました。舞台と客席が一体化してひとつの空間をつくりました。雑用に追われ会場の一部になれなかった私たちは、一抹のさびしさを感じつつも、そういった場を提供できたことをうれしく思っています。むしろ、誰かのイニシアティブによらずこのような空間が自然発生的に生まれたことに、人々の力と可能性を知らされ、絶賛の拍手をおくります。



カラワンの九州に行く

木戸 宏

「とにかくやってみますわー、ようわからんですけど、よろしく願いますわー」
（宮崎県・綾町）

「タイのあんちゃんがんばるげなき、きいちみらんな」
（大分県・大山町）

七月に入って突然、カラワンの九州コンサートはこんなふう準備されていきました。元はといえば私とPARCの井上礼子さんとのちよっとしたいき違いから、予定していたカラワンの九州日程に穴が空いてしまったため、つてを通して頼みこんでスケジュール化していたもの、綾町と大山町はいずれも名の知られた有機農業の町。これに北九州の旧産炭地、中間市の青年たちがカラワンコンサートに名乗りをあげてくれました。

「面白そうやきやっちみるや」

「金はなんとかなるくさ、赤字になったらそんときはタイ」ということで、どういうことになるやら……。

八月一九日、宮崎県綾町。町長の音頭取りで照葉樹林文化の町作りをすすめる綾町は人口七〇〇〇人余りの静かな農村です。

ここで豚飼いをする「綾豚会」という青年グループが中心になり、農協の後押しで開催することになりました。

「赤字になつたやろ」と私。

「農協の組合長があとは心配すんないなつたもん、何とかなるぢやないですか」代表の押田君の弁です。

「券売るとがおおごとで、ブタがブーブーいいよりました」

会場は町で唯一の近代的ホテル「サイクリングセンター」の五〇坪ほどの会議室兼宴会場です。農家の皆さん、農協の職員など約二〇〇人が集まりました。家族づれが多く、子供たちがたくさん来ています。スラチャイが子供たちをつかまえては「How old are you?」などと話しかけています。

会場が狭いのでドラムなし、ズーさんがコンガをたたき、トングラインさんが生ギターで、今回のカラワン・ツアーの中で唯一の異色のコンサート。とつてもいい雰囲気、案内役の重政君が、「東京の時よりずっとよかつた」と感激。「いやー迫力ありますわー、子供のためにもこげんとどんどんやらにやーですねあ」と農協の販売部長さん。コンサート後は、河原で夜の焼肉パーティー。みんなすつかりリラックスしていました。

二四日、水俣から阿蘇山外輪山を通過して大分県大山町へ。筑後川上流の峡谷にある人口四〇〇〇人程の山村。

そのまま通過すればナンニモないところです。ところがこの町には、コンサートホールもあれば町営のテレビ局もあります。入場は無料、全部農協もちです。「ちーとはゼニかけにや文化も育たんき」という訳で、三〇〇人程入るホールはほぼ満席。「タイのアンちゃん達」のメッセージに聞き入っています。

スラチャイが曲名の紹介をします。「ネクストソング、ティンアンメン」すかさず、会場から「わかつたぞー、天安門だろー」「オトーサン、ヨウシツテルネ」どつと爆笑の中でプログラムが進みます。最高の音響装置と町営テレビが中継する中、この日もカラワンはごきげんです。

二人ずつ農家に民泊した翌日は、町内を見学し、いよいよアジアンフェスティバル会場へ。二五、二七日の三日間にわたつて会場をギンギンに盛り上げた一行は二八日、最後のコンサート会場である北九州の中間市へ、「酒を飲まんと男やない」という九州ですでに一〇日。みんなほとんどアル中気味。演奏がはじまる時に差し入れた二ダースの缶ビールが、五曲も終らないうちに空になつていました。市内の若い教師たちが頑張つて集めた聴衆は約五〇〇人。スラチャイがすつかりごきげんで体育館を走り回っています。六〇すぎと思われる老夫婦が

まるで炭坑節を踊るように踊っていました。ベースのエディさんは女性にサインを求められて丸い顔をまん丸にしていました。

カラワンの九州コンサートツアーは、こんなふうによくの人びとの善意に支えられて無事終了しました。

さて、カラワンが九州に残したものはいったい何だったのでしょうか。カラワンはどこでも大評判でした。地元のスポーツ紙「エスニツクでハイなコンサートだった」と絶賛していました。ツアーの興奮がようやく納まった今、改めてカラワンとは何だったのか、各地で頑張ってくれた人たちが何を感じたのかをたずねてみました。

「どろくさいといえればいえるが、不思議な音楽やったな」

「九州の民謡に似てると思いました」

「なんかムズムズしたバイ」

「もう一回来たなら、もつとたくさん集まってもらえるんじゃないですか」

多くの人たちがきつと、同じ農耕民族としての根っ子にあるものを感じとったのではないのでしょうか。

「日本語、むずかしいね。みんなもタイ語、ワカラナイね。でも音楽、わかる。カラワンの音楽はインターナショナル。ハッピーね」

スラチャイさんのあいさつです。

皆さん、また、九州にいらっしやい。

